

# フランス語における具象名詞の 非可算性について

長 沼 圭 一

## 1. はじめに

英語、ドイツ語、スペイン語などでは、非可算名詞が不定の場合、通常無冠詞で現われる。一方、フランス語やイタリア語では、このような場合に部分冠詞が要求される。

一般に抽象名詞は非可算名詞に分類され、具象名詞でも物質名詞と言われるものは非可算名詞であるとされるが、ある名詞が可算か非可算かの区別はそう簡単ではない。英語では、辞書項目において名詞に可算か非可算かが示されており、名詞に内在的な性質として捉えられる傾向が強いが、フランス語では、辞書においてそのような表記はなく、話者が事物をどう捉えているかによって可算か非可算かが決まる。

本稿では、フランス語における部分冠詞の使用を観察し、名詞の可算と非可算を区別する基準がどこに存在するかを追究する。

## 2. 先行研究

まず、部分冠詞の用法について文法書における記述を参照する。

L'article partitif n'est autre chose, pour la valeur, qu'un article indéfini employé devant un nom pour indiquer qu'il s'agit d'une quantité indéfinie d'une réalité non nombrable, non comptable (substances *massières*, comme disent Damourette et Pichon) :

*Boire du vin.* — Aussi avec des noms abstraits non quantifiables : *Avoir du courage.* (GREVISSE & GOOSSE, 2011, p. 781)

Devant le singulier des noms de masse (*du plâtre, de la farine*) et des

noms dits « abstraits » qui ne renvoient pas à des entités comptables (*du courage, de la lâcheté*), on emploie les trois formes de l'article partitif : au masculin *du* et *de l'* selon que l'initiale du mot suivant est consonantique ou vocalique (*du vin / de l'alcool*) et au féminin *de la* et *de l'* dans les mêmes conditions (*de la neige / de l'eau*). On peut leur associer la forme *des* lorsqu'elle est employée avec des termes massifs essentiellement pluriels, c'est-à-dire dépourvus de singulier : *des décombres, des épinards*, etc.)<sup>1)</sup>. (RIEGEL, PELLAT & RIOUL, 1994, p. 161)

これら2つの説明にあるとおり、部分冠詞は「非可算」のものを表す名詞に付けるものであり、「非可算」の名詞とは「物質名詞」と「抽象名詞<sup>2)</sup>」であるとされている。

本稿では、とりわけ物質名詞の非可算性について取り上げることにする。島岡(1999)は「物質名詞とは具象名詞の中で一定の形をもたないもの、数えることのできないもの、言い換えれば、連続的 *continu*、非可算的 *incomptable* なものをあらわす」(p. 101)とし、以下のようなものを具体例として挙げている。

i. 材料となるもの：

béton 「コンクリート」	bois 「材」	coton 「木綿」
laine 「羊毛」	métal 「金属」	nylon 「ナイロン」
papier 「紙」	soie 「絹」	verre 「ガラス」

ii. 金属・元素：

or 「金」	argent 「銀」
cuivre 「銅」	fer 「鉄」
aluminium 「アルミ」	nickel 「ニッケル」
zinc 「亜鉛」	hydrogène 「水素」
oxygène 「酸素」	

iii. 食物：

beurre 「バター」	confiture 「ジャム」
fromage 「チーズ」	jambon 「ハム」
margarine 「マーガリン」	pain 「パン」
poisson 「魚」	poivre 「胡椒」

- |              |                |             |
|--------------|----------------|-------------|
| sel 「塩」      | sucre 「砂糖」     |             |
| salade 「サラダ」 | viande 「肉」     |             |
| iv. 飲料：      |                |             |
| eau 「水」      | bière 「ビール」    | huile 「油」   |
| café 「コーヒー」  | chocolat 「ココア」 | jus 「ジュース」  |
| lait 「牛乳」    | thé 「紅茶」       | vin 「ワイン」   |
| v. 気体：       |                |             |
| air 「空気」     | gaz 「ガス」       | vapeur 「蒸気」 |
- (島岡, 1999, pp. 101–102)

これらの例から言えることは、物質名詞は少なくとも固体、液体、気体のいずれかの形で存在しているものを表しているということである。

また、島岡(1999)が物質名詞の例として挙げている poisson について、大橋(1993)は以下のような説明をしている。

(1) M<sup>me</sup> Legrand achète *du poisson* au marché. (大橋, 1993, p. 19)

単数で部分冠詞がついているから、なにか大きな魚の切身を買うのかと思うとさし絵には何尾もの魚が描かれています。さし絵の間違いだろうと早合点してはいけません。食物として「魚」と言うときには、何尾であっても単数で *du poisson* と言ってよいのです。むしろ食べるぶんには、1尾の魚の肉であろうと2尾の魚であろうと問題ではなく、それが実際には数尾の魚であっても連続的にとらえられているわけです。むしろ、単数によって、魚がここでは食物としてとらえられていることが示されていると言ってもよいでしょう。

(大橋, 1993, p. 19)

大橋(1993)によれば、「単数複数の別は、ものが1つか2つ以上かということではなく、話者がそれを連続的な相でとらえているか、不連続的な相でとらえているか、という違い」(p. 19)を表す。すなわち、2つの区別は話者の捉え方の問題ということになる。小石(2001)も同様の指摘をしている。

可算名詞・不可算名詞の区別は単語に固定しているのではなく、話者がその概念をどう捉えるかによる。(小石, 2001, p. 26)

このことに関しては、英語との大きな違いとして、以下のようなことがしばしば指摘されている。

英語では、生きている牛は *ox* で、牛肉は *beef* です。同じように、豚は *swine* で豚肉は *pork*、羊は *sheep* で羊肉は *mutton*、仔牛は *calf* でその肉は *veal* となりますが、いずれも生きている動物はアングロ・サクソンの本来語で、肉の方はいまの *bœuf*、*porc*、*mouton*、*veau* にあたる古いフランス語からの借用語です。[中略] フランス語では、その区別は冠詞で示されるのです。「牛がいる」なら *Il y a un bœuf*。ですが「牛肉がある」なら *Il y a du bœuf*。つまり、この区別を表現するために、英語は語彙的な手段を用いるのに対し、フランス語は文法的手段によるわけです。[中略] 文法的手段(いまの場合は冠詞)によるなら、区別の性質がはっきりするうえ、その方法は一般性をもちます。すなわち *un bœuf : du bœuf = un porc : du porc = un mouton : du mouton* の関係が一目瞭然であるだけでなく、その各組の2語の差は「可算：非可算」であることが示され、その点で *un poisson : du poisson*、*un bois (林) : du bois (木材)*、*un vin : du vin*、*une élégance : de l'élégance...* などの差と等質であることもわかります。言語の機構の上からは、フランス語はあらゆる名詞を可算的にも非可算的にも使いうるようになっているのです。

(大橋, 1993, pp. 23-24)

すなわち、英語では動物と肉の名称を区別するが、フランス語では名詞自体は変えずに冠詞によって両者を区別するということである<sup>3)</sup>。

しかしながら、フランス語において動物名が部分冠詞とともに使用された場合、肉以外の解釈がありうることも指摘されている。

(2) *Il y a du saumon dans cette rivière*. (東郷, 2011, p. 19)

*un bœuf* が生きている1頭の牛で *du bœuf* は牛肉という図式を当ては

めると、7) [= (2)] では鮭の切り身が泳いでいると取られかねませんが、もちろんそんなことはありません。魚種としての *le saumon* 「鮭」を構成する成員である何十尾の鮭が川にいます。ここでは *le* がカテゴリー全体を、*du* がその部分を表しています。(東郷, 2011, p. 19)

すなわち、*du saumon* によって、「鮭の肉」を表すことは当然のことながら、「鮭の集団」をも表すことができ、どちらも物質名詞として扱われていることになる<sup>4)</sup>。しかしながら、一見全く違うように思われるものをなぜ同じ表現で表すことができるのであろうか。

このように、先行研究においては、名詞が可算となるか非可算となるか、すなわち名詞に不定冠詞が付くか部分冠詞が付くかの違いは、話者が対象をどのように捉えているかの違いによる、という考え方に行き着く。しかしながら、ある状況におけるある名詞について完全な主観によって可算か非可算かのどちらかを選択する決定権があらゆる話者に委ねられているとは考えにくく、どちらを選択するかは何らかの基準に基づいて行われているはずである。すなわち、可算と非可算の境界線がどこにあるかについてはフランス語話者の間で共通認識があると考えられるのである。以下では、この点について探っていくことにする。

### 3. 実例分析

#### 3.1. 粒状のもの

筆者は子供の頃に図鑑で「ガンジス川の砂を数える人<sup>5)</sup>」というような注釈がついた挿絵を見たことがある。確かに砂は一粒一粒分かれていて数えようと思えば数えられるかもしれない。しかし、フランス語では「砂」は、*du sable* のように非可算として扱われるのが普通である。日常生活においては砂を数える必要性がまず考えられないからであろう。塩 *du sel* や砂糖 *du sucre* についても同じことが言えるであろう。粒子が小さすぎると人は数えることを放棄してしまうのかもしれない。そうであるとすれば、大きい粒であれば人は数えるようになり、どこかに可算と非可算を分ける大きさの境界線があるのではないであろうか。

このことを調べるために、Frantext において 2001 年以降のものに絞って、同じ名詞について、部分冠詞、不定冠詞単数形、不定冠詞複数形を伴った

例がどれくらい存在するか調べることにする<sup>6)</sup>。sable, sel, sucre について調べた結果は以下の通りである。数字はそれぞれの用例が生じた数を表している。

du sable 46 / un sable 6 / des sables 4 「砂」

du sel 21 / un sel 2 / des sels 2 「塩」

du sucre 34 / un sucre 10 / des sucres 8 「砂糖」

このように、sable, sel, sucre については部分冠詞付きの例が圧倒的に多く、通常非可算名詞として使用されていることが分かる。なお、un sable, un sel は全て形容詞を伴っている例であり、sucre が可算名詞として用いられている例のほとんどは「角砂糖」の意味で用いられていた。また、des sables に関しては、基本的に des sables mouvants (風で移動する砂 [砂漠]) という表現として現れていた。

次に取り上げたいのは「コメ」である。米粒は砂に比べてだいぶ大きく、決まった形があり、一つ一つの区別はよりはっきりしていると言える。しかし、コメもフランス語では du riz と非可算のものとして認識されている。要するに、厳密には非連続的であっても、フランス語話者にとって数える必要がないか数えることが困難であると見なされるものは連続的であると判断され、非可算となると考えられる。Frantext においても、以下のように部分冠詞付きの例しか見られなかった。

du riz 24 / un riz 0 / des riz 0 「コメ」

一方、豆類については、可算として捉えるのが一般的であるようである。以下が示すように、豆類が部分冠詞とともに用いられる例はほとんど見られなかった<sup>7)</sup>。

de la cacahouète 0 / une cacahouète 0 / des cacahouètes 1 「ラッカセイ」

de la fève 0 / une fève 0 / des fèves 2 「ソラマメ」

de la lentille 0 / une lentille 0 / des lentilles 2 「レンズマメ」

du pois 0 / un pois 0 / des pois 2 「エンドウマメ」

du pois chiche 0 / un pois chiche 0 / des pois chiches 1 「ヒヨコマメ」

こうして見ると、米と豆の間に可算と非可算の境界線を引きたくなるが、必ずしも大きさだけの問題ではないようで、ことはそう単純ではない。豆類に属するはずのダイズは部分冠詞付きで現れている。

du soja 1 / un soja 0 / des sojas 0 「ダイズ」

- (3) Cet argent est à toi. Il peut te servir pour nourrir convenablement la planète !... Pour planter du maïs et *du soja* sans polluer les rivières et contaminer les femmes de Salto. Il peut servir à financer tes recherches, n'est-ce pas ?

(GARAT, Anne-Marie, *Pense à demain*, 2010, p. 361, Frantext)

この例においては、ダイズがトウモロコシと並記されていることから、他の豆類とは違い、トウモロコシやコメと同様、穀類として解釈され、非可算として扱われていると推測される。すなわち、可算か非可算かの判断基準は、粒の大きさではなく、どのカテゴリーに属していると解釈されているかであると考えられるのである。これは、魚 *poisson* が「生物」というカテゴリーに属すれば可算となるが、「食物」というカテゴリーに属すれば非可算となることと同様であろう。

### 3.2. 果物の名前

次に、果物<sup>8)</sup>の名前について調べてみることにする。Frantext で検索した結果は以下のとおりである。

de l'abricot 0 / un abricot 4 / des abricots 1 「アンズ」  
de l'amande 0 / une amande 3 / des amandes 3 「アーモンド」  
de l'ananas 1 / un ananas 0 / des ananas 0 「パイナップル」  
de la banane 1 / une banane 12 / des bananes 12 「バナナ」  
du cassis 0 / un cassis 1 / des cassis 1 「カシス」  
de la cerise 1 / une cerise 1 / des cerises 14 「サクランボ」  
du citron 0 / un citron 10 / des citrons 9 「レモン」  
du coing 0 / un coing 3 / des coings 0 「マルメロ」  
de la datte 0 / une datte 1 / des dattes 6 「ナツメヤシ」

de la figue 0 / une figue 8 / des figues 7 「イチジク」  
de la fraise 0 / une fraise 7 / des fraises 17 「イチゴ」  
de la framboise 0 / une framboise 0 / des framboises 6 「ラズベリー」  
de la grenade 0 / une grenade 5 / des grenades 2 「ザクロ」  
de la groseille 0 / une groseille 1 / des groseilles 5 「スグリ」  
de la mandarine 0 / une mandarine 2 / des mandarines 1 「ミカン」  
de la mangue 0 / une mangue 4 / des mangues 2 「マンゴー」  
du marron 0 / un marron 1 / des marrons 4 「クリ」  
du melon 1 / un melon 2 / des melons 3 「メロン」  
de la mûre 1 / une mûre 0 / des mûres 8 「クワ」  
de la myrtille 0 / une myrtille 0 / des myrtilles 1 「ブルーベリー」  
de la noisette 1 / une noisette 3 / des noisettes 6 「ヘーゼルナッツ」  
de la noix 0 / une noix 5 / des noix 14 「クルミ」  
de l'olive 0 / une olive 2 / des olives 9 「オリーブ」  
de l'orange 0 / une orange 10 / des oranges 15 「オレンジ」  
du pamplemousse 0 / un pamplemousse 2 / des pamplemousses 0 「グレープフルーツ」  
de la pastèque 0 / une pastèque 1 / des pastèques 0 「スイカ」  
de la pêche 0 / une pêche 3 / des pêches 4 「モモ」  
de la pistache 0 / une pistache 0 / des pistaches 6 「ピスタチオ」  
de la poire 0 / une poire 9 / des poires 10 「洋ナシ」  
de la pomme 0 / une pomme 41 / des pommes 25 「リンゴ」  
de la prune 0 / une prune 0 / des prunes 3 「プラム」  
du raisin 6 / un raisin 1 / des raisins 12 「ブドウ」

上の統計からほとんどが可算名詞として扱われていることが分かるが、いくつか部分冠詞付きで現れている例が見られる。これらは3つのグループに分類できると思われる。

1. 果肉を切り分けたもの

ananas 「パイナップル」、banane 「バナナ」、melon 「メロン」

(4) Je descendis dîner. Pas d'alcool. Auparavant nous étions passés devant



les halles municipales, avec leurs amas de melons, de papayes, de mangues, et de verdure variée. Notre repas commença et se termina par des betteraves et *de l'ananas* en boîte. J'ai interrogé sur leur travail le maître de maison et un collègue qui nous avait rejoints.

(MATHEWS, Harry, *Ma vie dans la CIA : une chronique de l'année 1973*, 2005, p. 30, Frantext)

2. 液状やペースト状に加工されたもの

cerise 「サクランボ」、mûre 「クワ」、noisette 「ヘーゼルナッツ」

- (5) Il avait versé deux petits verres d'alcool blanc, et coupé la tranche d'une miche de pain, qu'il couvrait doctement de confiture.

- Mangez. Après une émotion pareille, il faut se remplir l'estomac. C'est *de la mûre*. Ma mère me l'a portée hier. Vous vous sentez mieux ?

(GARAT, Anne-Marie, *Dans la main du diable*, 2006, p. 374, Frantext)

3. 房状のもの

raisin 「ブドウ」

- (6) Ça te permet de rester un peu, de parler avec tes amis après la projection, et pendant ce temps moi j'avance en voiture, tu me confies tes clés, je mets la table et je prépare. Qu'est-ce que tu veux, des poivrons, des salades, des pistaches, des olives, *du raisin* noir ? Le pain, tu t'en occupes. Alors je prends le reste.

(MREJEN, Valérie, *Eau sauvage*, 2004, p. 70, Frantext)

上記の 1 と 2 に関しては、果物を切ったり潰したりして原形をとどめていないため、非可算となることは容易に理解できる。しかしながら、3 においては、決して加工されているわけではないブドウが非可算として扱われている。粒の大きさで考えれば、たいていの豆類より大きいため、単純に粒の大きさだけが可算と非可算の区別に関与しているわけではないことがここでも明らかである。これについては、ブドウを房状のものとして捉えた場合は非可算として扱うのがフランス語話者の共通認識としてあるから

のようである。すなわち、ブドウの粒が成している集合体を連続的なものとみなしているということであろう。サケの集団について部分冠詞を用いて *du saumon* と表現するのと同じ理由であると考えられる。

### 3.3. 花の名前

最後に、花の名前について観察してみる。Frantext で検索した結果は以下のとおりである。

de l'anémone 0 / une anémone 0 / des anémones 2 「アネモネ」  
du chrysanthème 0 / un chrysanthème 1 / des chrysanthèmes 3 「キク」  
de la clématite 0 / une clématite 1 / des clématites 0 「クレマティス」  
du coquelicot 0 / un coquelicot 7 / des coquelicots 5 「ヒナゲシ」  
du cosmos 0 / un cosmos 0 / des cosmos 1 「コスモス」  
du cyclamen 0 / un cyclamen 0 / des cyclamens 2 「シクラメン」  
du dahlia 0 / un dahlia 1 / des dahlias 5 「ダリア」  
du gardénia 0 / un gardénia 1 / des gardénias 0 「クチナシ」  
de la glycine 2 / une glycine 5 / des glycines 1 「フジ」  
de l'hortensia 0 / un hortensia 1 / des hortensias 5 「アジサイ」  
de l'iris 0 / un iris 0 / des iris 3 「アヤメ」  
de la jacinthe 0 / une jacinthe 0 / des jacinthes 2 「ヒヤシンス」  
du jasmin 3 / un jasmin 3 / des jasmins 3 「ジャスミン」  
de la jonquille 0 / une jonquille 0 / des jonquilles 1 「キズイセン」  
de la lavande 1 / une lavande 1 / des lavandes 1 「ラベンダー」  
du lilas 1 / un lilas 4 / des lilas 3 「ライラック」  
du lys 0 / un lys 1 / des lys 3 「ユリ」  
du magnolia 0 / un magnolia 4 / des magnolias 2 「モクレン」  
de la marguerite 0 / une marguerite 2 / des marguerites 4 「マーガレット」  
du mimosa 1 / un mimosa 1 / des mimosas 2 「ミモザ」  
du muguet 1 / un muguet 1 / des muguets 0 「スズラン」  
du myosotis 0 / un myosotis 0 / des myosotis 2 「ワスレナグサ」  
du narcisse 0 / un narcisse 1 / des narcisses 0 「スイセン」  
du nénuphar 0 / un nénuphar 3 / des nénuphars 2 「スイレン」  
de l'orchidée 0 / une orchidée 4 / des orchidées 3 「ラン」

du pissenlit 0 / un pissenlit 0 / des pissenlits 6 「タンポポ」  
de la pivoine 0 / une pivoine 3 / des pivoines 0 「ボタン」  
de la rose 0 / une rose 29 / des roses 32 「バラ」  
du tournesol 0 / un tournesol 0 / des tournesols 1 「ヒマワリ」  
de la tulipe 0 / une tulipe 1 / des tulipes 7 「チューリップ」  
de la violette 0 / une violette 5 / des violettes 6 「スミレ」

ほとんどの例が不定冠詞付きで現れていることが分かるが、以下の花においては部分冠詞付きの例も観察されている。

glycine 「フジ」、jasmin 「ジャスミン」、lavande 「ラベンダー」、lilas 「ライラック」、mimosa 「ミモザ」、muguet 「スズラン」

- (7) C'est une rose que j'ai coupée dans le jardin. Sens ! Le rosier grimpant a poussé, il a des fleurs splendides. J'avais planté des frésias, *de la glycine*, des pruniers, des rosiers mais tout a gelé pendant l'hiver. Il a fait froid. Même les tuyaux ont éclaté.

(MREJEN, Valérie, *Eau sauvage*, 2004, p. 26, Frantext)

- (8) Si vous restez à Istanbul jusqu'au commencement du printemps, je vous ferai aussi visiter la campagne, nous avons des roseraies sauvages extraordinairement splendides, des collines accueillant des figuiers, des tilleuls, des cyclamens, *du jasmin*...

- Je ne pense pas que nous resterons si longtemps, répondit Alice.

(LEVY, Marc, *L'étrange voyage de Monsieur Daldry*, 2011, p. 201, Frantext)

- (9) Elle avait beau prendre des précautions, d'extraordinaires précautions pour son coucher, et son confort, et sa paix, respirer *de la lavande* ou du camphre, mouiller ses paupières à l'eau de bleuet, rien n'y faisait.

(GARAT, Anne-Marie, *Dans la main du diable*, 2006, p. 577, Frantext)

- (10) Dimanche

Journée extraordinaire. Mais je n'ai rien fait. Ce matin, je suis allée apporter *du lilas* à Bonne Maman et à Françoise Masse. Le matin était si joli, si ensoleillé, avec les marronniers en fête et le ciel bleu, que j'ai

oublié tout remords et que je me suis laissée aller à la beauté environnante.

(BERR, Hélène, *Journal 1942–1944*, 2008, p. 40, Frantext)

- (11) - Attends une minute, je me dose mon Nesquik... Tu nous prépares la liste des courses ?

- Ouais... Comment ça s'écrit la riviéra ?

- Avec une majuscule et sans accent.

- Merci.

*Du mimosa* comme sur la rivié Riviera... Il plia son petit mot et le déposa avec le vase près de l'escargotte. Il se rasa.

(GAVALDA, Anna, *Ensemble, c'est tout*, 2004, p. 503, Frantext)

- (12) Ils, lui certainement, achetaient souvent des fleurs, mimosa le 16 mars, fleurs le 19 mars, un bouquet le 21 mars, fleurs pour sa mère le 24 mars, fleurs le 28 mars, des tulipes le 12 avril, quatre brins de muguet le 30, les fleurs du 1er mai, qui furent sans doute encore *du muguet*, fleurs le 9 mai. S'il fallait un endroit, dans ce texte, où évoquer le printemps à Alger, ce serait celui-ci. Mais non.

(AUDIN, Michèle, *Une vie brève*, 2012, p. 109, Frantext)

見たところ、木か草かの違いは関わっていないようである。これらの花に共通するのは、前項で見たブドウのように房状に花が付いているか、あるいは房状でなくとも一本の茎または枝に複数の花が付いているという点であると考えられる。一本の茎に一つの花が付く花であればほぼ間違いなく可算名詞として扱われるが、上記の花のように一本の茎あるいは枝にいくつもの花が付くタイプのものについては、花の集合体を連続的に捉え、物質名詞として扱われうると言えるであろう。

#### 4. おわりに

本稿では、フランス語の具象名詞における可算と非可算の境界線について、粒状のもの、果物、花の例を取り上げて論じた。砂のように細かい粒に関しては当然のごとく非可算として扱われるが、豆粒ほどの大きさのものであれば可算として扱われるものが多くなる。しかしながら、単に大き

さが大きければ可算となるわけではない。多くの豆類が可算として扱われる一方で「ダイズ」に関しては非可算として扱われている例が見られる。これは、豆類として捉えられれば可算となるが、穀類として捉えられれば非可算となるというように、可算と非可算の区別はどのカテゴリーに分類されるかによって左右されるからであると考えられる。また、多くの果物が可算として扱われる中、「ブドウ」は原形をとどめた状態で非可算として扱われる。これは、ブドウが房状に生るため、連続的な集合体として捉えられているからである。このことは花にも当てはまる。「フジ」のように房状に花が付くものや「ラベンダー」や「スズラン」のように一本の茎に花がいくつも付くものは非可算として扱われる。このように、具象名詞の可算と非可算の区別には、その物体がどのカテゴリーに属するか、その物体が個体同士で群れて存在しているかどうか、といった問題が関与していると考えられる。

## 注

- 1) 現在、規範的な文法では *des* は不定冠詞としてのみ示されるが、一部の文法書や研究者においては、*des* は用法に応じて不定冠詞と部分冠詞とに区別されている。
- 2) 抽象名詞については、どこまでを抽象名詞と呼ぶべきかということがしばしば争点となる。詳しくは、KLEIBER (1994) 等を参照のこと。
- 3) しかしながら、英語でも *chicken*、*fish* のように生きている個体にも肉にも使える語もある。また、英語においても可算・非可算の別は語自体に内在する性質ではなく、文脈によって使い分けができることを東郷 (2011) は次のグリースンの例を引いて指摘している。

a) Johnny is very choosy about food. He will eat *book*, but he won't touch *shelf*.

(東郷, 2011, p. 13)

ジョニー君は人間ではなくシロアリという設定です。ふつうは *a book*、*a shelf* という不定冠詞が付く名詞が無冠詞になっていることに注目してください。英語では非可算名詞は無冠詞になります。ジョニー君はシロアリですから、人間とは事物の捉え方がちがいます。本も本棚も食べ物と捉えているので、ジョニー君の目から見れば物質名詞化されて非可算になるのです。(東郷, 2011, p. 13)

- 4) 英語においては、*salmon* のように群れを成す魚や *sheep* のように群れを成す動物は単数形と複数形が同じ形になる。確かに、文法上は単数と複数の違

いがあるであろうが、名詞自体の形に区別がないのは、フランス語と同様に、本来はその集合体がそれぞれの個体の区別をつけない連続的なものとしてみなされていたからではないであろうか。

- 5) 大きな数字の単位に「恒河沙」(10<sup>52</sup>) というものがあるが、これはまさに「ガンジス川の砂」の意味である。
- 6) du, de la, de l', des については、前置詞 de と定冠詞の組み合わせであるものは除外した。また、語が本稿で取り上げている意味とは違う意味で用いられている例も除外した。
- 7) haricot 「インゲンマメ」のように莢ごと食べることができる豆類については、莢に入った状態で数えることがあるため除外した。
- 8) 「果物」の定義については、『日本大百科全書』に以下のように書かれている。

広義では木や草の果実で食用となるものの総称である。狭義では「木の物」、つまり「木のなり物」の意で、木本性植物の果実で食用となるものをいう。慣用的には「木のなり物」と、草本性植物のパナナやパイナップルなどのほか、園芸上は蔬菜（そさい）として扱われるメロン、スイカ、イチゴなども含む。

本稿ではこの記述の広義での解釈に従うこととする。

## 参考文献

- 朝倉季雄 (2005) : 『フランス文法集成』, 白水社.
- 大橋保夫 (1993) : 「フランス語とはどういう言語か」, 『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, pp. 7-57.
- 小石悟 (2001) : 「部分冠詞について」, 『フランス語学の諸問題 [ I ]』 (第二版), 三修社, pp. 26-37.
- 島岡茂 (1999) : 『フランス語統辞論』, 大学書林.
- 東郷雄二 (2011) : 『中級フランス語 あらわす文法』, 白水社.
- 松原秀治 (2008) : 『フランス語の冠詞』 (新装版), 白水社.
- GREVISSE, M. & A. GOOSSE (2011) : *Le bon usage* (15<sup>e</sup> éd.), De Boeck - Duculot, Bruxelles.
- KLEIBER, G. (1994) : *Nominales : Essais de sémantique référentielle*, Armand Colin, Paris.
- RIEGEL, M., J.-C. PELLAT & R. RIOUL (1994) : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France, Paris.